穂　学

令和元年度
広州日本人学校　学校便り
［Ｎｏ．６］
令和元年９月12日（木）
発行責任者 校長　喜屋武浩司

「一人一人が持続可能な社会の担い手②」

校長　喜屋武　浩司

穂学Ｎｏ．５で「ユニセフハウス」（正式名称）について少しお話ししましたが、今号では９月３日（火）の校長講話で児童生徒にお話ししたユニセフの活動について紹介したいと思います。

ユニセフ（ＵＮＩＣＥＦ）は「国際連合児童基金」の英語の頭文字をとったもので、世界中の子どもたちが健康で平和に暮らせるように、そして、子どもたちの夢が叶えられ、希望を持って生きていけるように、という願いから設立され活動しています。主に開発途上国の子どもたち、地震、津波、洪水、台風、干ばつ、武力紛争などにより難民となった子どもたちに対して、食料や水、医薬品やテントなどを届け、かけがえのない子どもたちの命を救っています。

日本でも、戦後まもなくは食料がないため、ユニセフからパンとミルクの支援をもらい、多くの子どもたちの成長が助けられました。

開発途上国では、１年間に約 970 万人の子どもたちが５歳の誕生日を迎えられずに亡くなっています。また、１分に一人、15 歳未満の子どもがエイズに関連した病気で命を失っています。

また、世界で 10 億人以上の人々が安全でない水を毎日の生活で使っていて、26 億人の人々はトイレなど基本的な衛生施設がありません。

さらに、約 9000 万人の子どもたちが学校に通えず、家事や農作業を手伝っていたり、路上で靴みがきや物売り、工場で働かされています。

講話の最後に、「みんなそれぞれ国は違っても、全ての子どもたちは地球市民です。地球環境や貧困、人口増加など地球の全ての人に関わる問題に関心を持ってください。そのことが広州日本人学校の目指す『国際社会に生きる児童生徒』につながります」と締めくくりました。

講話後、次のような感想が学級通信（6 年）で紹介されていました。

「栄養不足や児童労働でたくさんの子どもたちが命を落としたりしているそんな世の中が不平等だと思います。しかし、それを変えることができるのは平和な生活をしている私たちだと思います。」「これからは、今までよりも自分の命を大切に生きて、同じ地球市民として国境関係なく助け合うことができる世界を築いていきたい。」「校長先生が話していたユニセフハウスに行ってみたいです。そして、ユニセフについてもっと知りたいと思いました。」

素敵な感想です。これからも広く世界の出来事に関心をもって、いろいろなことを学んでほしいと願います。ぜひご家庭でも話題にあげていただければ幸いです。